阿波の職人シリーズ　第2回

阿波藍染め職人

古庄（ふるしょう）　紀治（としはる）さん

大学開放実践センター・教授（職業能力開発）　森（もり）　和夫（かずお）

徳島と藍の歴史は長い。藍は植物である。この植物は織物の染色に使う。徳島はその藍の産地で、全国的にも良質の藍の産地として名を知られていた。吉野川流域がその主な生産地帯である。海外から化学染料が日本に入るまでの間、染料としての地位を誇っていたのである。この藍の生産によって現在の徳島の経済的な基礎が築かれたといってもよい。「藍より青く」という言葉は藍の色あいを良く表わしている。今回は藍の魅力とその技について阿波藍染め職人の古庄さんを訪ねることにした。＊訪問先について　古庄藍染工場は徳島市佐古七番町9―12にあり、見学者も受け入れている（電話088・622・3028要予約）。製品は県物産館、そごう徳島店、藍の館、藍蔵などで購入できる。

絹を藍染めする

徳島大学蔵本キャンパスから歩いて約10分のところに古庄染工場はある。川沿いの工場である。工場に入ると藍染めに必要な工程ごとの設備がある。左の展示コーナーには美しい藍染めの作品や「卓越技能賞」などが見える。古庄紀治（ふるしょう・としはる）さんは工場の入り口を入って一番、奥で作業をしていた。綿織物に型で防染糊を置いているのであった。これはなんと言う方法なのだろうか。まるでシルクスクリーンのようである。糊を置いた部分に藍が浸透しないようにしているのだ。後で聞いた話であるが、シルクスクリーンはこの「型ほりの技法」を改良した方法で、染めの歴史が先になる。

「私は初めから藍染めをしていたのではなくて、東京の楽団でギターを弾いていました。」と話し始めた。東京から家に戻って、家業の藍染めを始めたのである。当時は化学染料が主流で、藍染めは少なくなっていた。その後、全国の藍染めの工場を見て歩いた。その頃、京都の生活工藝館「無名舎」で蜂須賀藩の絹の藍染めを見つけた。当時、「絹は藍染めできない」と一般に言われていたのだが、古庄さんはその再現に成功した。アルカリに木灰を使ったのだ。これもあって「卓越技能賞」を受賞した。

今、目の前で作業している染め方は「注染（ちゅうせん）ぞめ」という方法である。これは全国でも大阪、浜松、徳島にあるだけだ。この染め方は次のように行なう。初めに織物に模様を描いた型をあてて、型を使って模様どおりに糊をヘラで置く。長尺の反物を何段かに折りながら糊置きをする。そして、藍を注ぐ。この後、水洗いして乾燥する。

品質の決め手は仕上がり

「藍染めの品質の決め手は仕上がりです。ムラ無く、思う色に染めます。」と語る。「それと…、染めている時の色と、乾燥時の色が違うので、作業しながら仕上がりの色を考えるのです。」と言う。注染という方法は後戻りや、修正ができない仕事だ。「藍を今日は裏表7回づつ、計14回注いで染めます。」左右、前後、裏表と言うように織物を置き換えながら注ぐことでムラ無く仕上がるのである。注ぐ回数が多いほど色の濃さは濃くなる。予定した色を考えて回数を計画する。だから、仕上がりの明確なイメージが無ければ作業はできない。技能は「個別に対する対応」であるから、諸条件の変動にあわせて作業を進め、処置をする。この「注染」でも糊の成分、綿織物、型、ヘラ、ツボンダ（注染用の設備の名称）などの状況が違う。これを的確に把握して行動に組み立てる。古庄さんの技を見て、一見、単純そうで、そうではない動きに多くの技の背景を見た思いがした。

藍染めとエコサイクル

染めは人の知恵によって作り上げた技である。染めた織物を纏（まと）うことで生活が豊かになるように、染め作業は纏（まと）う人間の姿を意識において行なうことで豊かな作業になるといえよう。藍染めが化学染料と違って、自然の摂理にかなった方法、エコサイクルにかなった方法であるとすれば、その存在をもっと誇ってよいように思う。そのように感じながら工場を後にした。